

手紙

カンダユウコ

あのひとにふさわしい便箋と
思う、の速度に寄りそうペンと
数十円の切手が一枚あればいいのだ

きみの思うと同じ波動で手が動く
きみのかたちの文字が現れる

機械になにひとつ操作されない
まっしろな自由

数枚の便箋をゆっくりと折りたたむ
折ると折るは似ているな
と思いつながら

その祈りが手をはなれて
赤い箱の中に消えたあとは
待つ

洗濯ものを干しながら
薬罐にお湯をわかしながら
スープの野菜を刻みながら

数日か 数週間か
へたをすると一年かもしれないが
待つ

愚か者のように

装わないことばが返ってくるのを
多さに狎^なれあわないものを
時間をかけた誠実を